

子ども文書館だより  
ふみくら

ふじさわしもんじょかん  
藤沢市文書館

Fujisawa City Archives

〒251-0054 神奈川県藤沢市朝日町12-6

TEL 0466-24-0171 FAX 0466-24-0172

URL <http://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/>

第2号

2010年3月31日発行



しょうわ ようちえんじ ぼしゅう  
昭和5(1930)年の幼稚園児の募集チラシ

上の写真は、今から80年前に、遊行寺の中にあった「藤沢幼稚園」が印刷したチラシです。この幼稚園は3学期制で、満3歳から子どもを預かっていました。2番目の案内で「束修金」とあるのは入園金のこと、この幼稚園ではかつては50銭でした。この金額は1円の半分で、牛乳が6合(およそ今の牛乳ビン6本分)買える値段です。しかし、この頃は世界中の景気が悪く、毎日のお米やお醤油を買うことすら難しい人もいた厳しい時代でした。チラシに「入園金はいりません」とわざわざ書いてあることから、子どもたちを幼稚園に預けようとしても、入園金でさえ高く払えない人々が、藤沢にもいたことがわかります。(中村)

## 私たち<sup>もんじょかん</sup> 文書館<sup>しごと</sup> の仕事 (第2回) 市の歴史<sup>れきし</sup>を本にする

私たちは、藤沢市のあゆみを本にまとめています。そのために、いろいろな資料<sup>しりょう</sup>を調べて集めたり、昔<sup>むかし</sup>から市内に住んでいる人たちにお会いして、聞き取りをしたりして調べています。

### 市の歴史を本にする

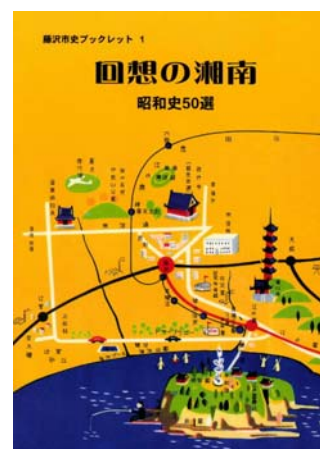
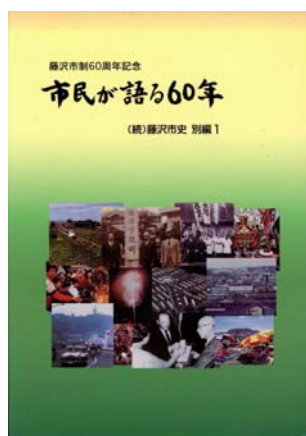
私たちは、今から44年前の昭和41(1966)年に、藤沢市の歴史を本にする仕事<sup>ししへんさんじぎょう</sup>(市史編纂事業)を始めました。これは、藤沢市の歴史を調べた成果<sup>せいか</sup>を、市民が読みやすいように本にするものです。まず、くずし字で書かれた古文書<sup>こもんじょ</sup>や、石碑<sup>せきひ</sup>などに刻まれた文章<sup>きざ</sup>(<sup>ぶんしょう</sup>金石文<sup>きんせきぶん</sup>といいますが)などを、今使っている文字に直した資料編<sup>しりょうへん</sup>が3冊、続いて原始・古代<sup>げんし</sup>から戦後にいたるまでの藤沢のあゆみを記した通史編<sup>つうし</sup>が3冊、本になりました。そして、藤沢に残る風習<sup>のこ</sup>や文化遺産<sup>ふうしゅう</sup>をまとめた民俗・文化遺産編<sup>ぶんかいさん</sup>が1冊、最後に、藤沢で起こったできごとを年ごとにまとめた年表<sup>ねんぴょう</sup>1冊も本になり、事業は昭和56(1981)年にひとまず終了<sup>しゅうりょう</sup>しました。

しかし、この市史は、昭和30(1955)年から後の藤沢の歴史については、ふれることができませんでした。そこで、平成4(1992)年4月からは(続)藤沢市史の編集<sup>ぞく</sup>にとりかかりました。これは、次のような基本方針<sup>へんしゅう</sup>にもとづくものです。

- (1)日本のあゆみだけでなく、世界のあゆみの中での藤沢市のあゆみをまとめるとともに、これまで書かれてこなかった、藤沢市民のあゆみ<sup>ほ</sup>を掘り起<sup>お</sup>こす。
- (2)将来あるべき藤沢の姿を考える材料になるような、広い見方をする。
- (3)歴史学だけでなく、関係する学問からの協力を受けながら、歴史の本を作る。(中村)



これまでの藤沢市史



今進めている(続)藤沢市史

え かがき かた ふじさわ 第1回 え しま 江の島(1)



今<sup>てまえ</sup>の江の島全景。手前の海岸部分が大き<sup>か</sup>く変わりました。

絵はがき「江ノ島全景」(明治30年代前半頃)

上の写真は、今からおよそ110年ほど前に、<sup>げんざい すばな</sup>現在の洲鼻通りの方向から江の島方面<sup>うつ</sup>を撮したものです。奥に江の島があり、中央に延びるのが砂州<sup>おく の さす</sup>で、右側は片瀬川<sup>みぎがわ かたせがわ</sup>の河口<sup>かこう</sup>です。この頃は河口には橋がなく、渡し舟<sup>わた ぶね</sup>で行き来する程度でした。

江の島の<sup>ひだりがわ</sup>左側には<sup>しょうてんじま</sup>聖天島が見えます。今は埋め立てられていますが、この頃は引き潮の時以外は島でした。江の島と片瀬の岸との間には、木でできた<sup>さんばし</sup>栈橋が架けられていました。栈橋は砂州の先から延びているだけで、今の橋より<sup>みじか</sup>短く、<sup>たいふう</sup>台風などで大波が押し寄せると、すぐ壊れるものでした。

片瀬川の河口付近では<sup>こぶね と</sup>小舟が泊まり、人々が岸に<sup>あつ</sup>集まっています。河口付近は<sup>きすいいき</sup>汽水域<sup>ま あ</sup>といって、川の水と海の水が混じり合う場所です。このような場所には魚などがたくさんいるため、<sup>じび あみ</sup>地引き網などで<sup>りょう</sup>漁をすることが行われました。<sup>かわぎし</sup>川岸に人々が<sup>おおぜい</sup>大勢いるのは、網を引き終わって、とれた魚などをみんなで<sup>わ</sup>分けているところではないでしょうか。砂州を<sup>ある</sup>歩いている人も<sup>うつ</sup>写っていますが、この人たちは、手に入れた自分の<sup>と ぶん</sup>取り分を持って家に帰ろうとしているのではないかと思います。

この絵はがきの<sup>げんぶつ</sup>現物は<sup>さいしき</sup>彩色<sup>ぬ</sup>といって、写真を白黒印刷したものに手できれいな色が塗られています。ホームページでも色を見ることができですが、文書館では実物を見ることができます。(中村)

## クイズ・写真に見る藤沢（第1回の答え）

下の写真2枚は、藤沢市内の同じ駅を撮ったものです。この駅名は何でしょうか？



(1)大正13(1924)年



(2)昭和50(1975)年

【答え】 これは藤沢駅で、2枚とも北口を撮ったものです。

【解説】 藤沢駅は、明治20(1887)年の東海道線開通（横浜 国府津駅間開通）と同時に開業しました。その後、大正12(1923)年9月の関東大震災で駅舎はつぶれてしまいましたが、その翌年に建て直されました。(1)の写真は、震災1年後に建て直された藤沢駅を撮ったものです。

第2次世界大戦が終わっても(1)の駅舎は使われ続け、(2)の駅舎に建て替えられたのは、今からおよそ50年ほど前になります。やがて日本全体が豊かになるなかで、それまで高い建物（たてもの）がほとんどなかった藤沢駅の北口に、大きなビルが建ち始めました。そして、駅の南口にもビルが立ち並ぶようになります。

駅舎が今の形になったのは、30年前の昭和55(1980)年6月1日のことでした。今の藤沢駅は「橋上駅舎（きょうじょうえきしゃ）」といって、線路の上に駅舎が置かれるようになっています。これによって、駅を取り巻く景色（けしき）も大きく変わることになりました。

これが、藤沢駅の歴史（れきし）です。一つの駅でも、いろいろな物語がありますね。（中村）



(3)新装（しんそう）なった藤沢駅（昭和55(1980)年）

昭和52年に着工（ちゃっこう）され、およそ23億1500万円をかけた新駅舎（かんせい）が完成（かんせい）し、この年の5月31日に国鉄（現・JR）・小田急・市の共催（きょうさい）で落成式（らくせいしき）が行われました。この駅舎が今も使われています。